

五十嵐篤好『天朝墨談』解題

永 由 徳 夫

A Bibliographical Introduction to :
Atsuyoshi Igarashi “Tenchobokudan”

Norio NAGAYOSHI

群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編

第74巻 9—21頁 2025年2月 別刷

五十嵐篤好 『天朝墨談』 解題

一 五十嵐篤好の生涯

五十嵐篤好（寛政五—万延二（一七九四—一八六一））は、江戸時代後期の国学者である。越中国砺波郡内島村（現在の富山県高岡市東五位）の出身で、篤好の他、厚義とも記す。幼名は小五郎、長じて小豊次、後に父の名を襲って孫作と改めた。臥牛齋と号し、また香々瀬・鳩夢・雉岡・麗鳴花園等の別号がある。

国学では、本居大平（宣長の養子）や富士谷御杖らに師事し、『歌学訓』『雉岡随筆』『伊勢物語披雲』等の著作を残している。但し国学にとどまらず、和算や測量、農政にも通じ、『新器測量法』といった一書も著した。多数ある著作の中でも、天保年間に著した『天朝墨談』（全五巻）は、日本の書道の素晴らしさを称揚した大著で、術語の解釈、文房四宝の解説にまで及んだことは、特筆に値する。

五十嵐篤好は、越中国砺波郡内島村の十村肝煎（十村頭、十村とねた組長。他藩における大庄屋）を務め、当職においては五十嵐小豊次を名乗った。国学者としては篤好、十村では小豊次と称すること、己が立場を区別していたことが窺える。

群馬大学共同教育学部国語教育講座 永由徳夫

この五十嵐小豊次は、襲名性を有する名跡で、古くは鎌倉時代より越後国蒲原郡下田郷の領主が、代々五十嵐小文治（小豊次）を名乗ったという。鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』には、建暦三年（一二一三）に北条氏と和田氏が戦った和田合戦で、北条方の武士として、「敵干彼之軍士等無免死。所謂五十嵐小豊次、葛貫三郎盛重……」と記述されている。

さて、豪族五十嵐氏は、越中にもまで勢力を拡大したが、篤好の先祖は、越後国蒲原郡伊賀良志（五十嵐）神社の神主であったとも伝えられる。現在、五十嵐神社は新潟県三条市（旧下田村）にあり、その近くに、新潟県指定文化財（史跡）の「五十嵐館跡」（一九七三年指定）もある。「五十嵐館跡」の現地案内板（新潟県教育委員会、三条市教育委員会設置）には、「地元では、源頼朝に仕え、豪勇で知られた五十嵐小文治吉辰が築いたものと伝えられています。」と解説されている。『下田村文化財報告書一…五十嵐小文治館発掘調査報告』（一九七三年）によると、館は鎌倉時代前期には完成したという。

篤好が、十村として、五十嵐家に由緒ある「小豊次」を名乗った理由が推察され、所謂公私を区別するとともに、強い自負や責務を伴う

ものでもあったと思われる。凶作に備えた「備荒倉」を作り、測量に一三年、掘削工事に七年をかけた大工事「舟倉野用水」（富山市大沢野）に携わり、文化一三年（一八一六）に完成させた。一方で、流浪人を宿泊させたかどで、一年に及ぶ閉門を命ぜられたこともあり、また、讒言にあつて投獄され、一時、能登島に島流しの刑にもあつた。晩年はその多くを金沢の地で過ごし、万延二年（一八六一）正月二四日に、六九歳の生涯を閉じた。その激動の人生は、強い口吻が随所に見られる『天朝墨談』にも反映しているように思われる。なお、篤好は、昭和三年（一九二八）、従五位を追贈された。

なお、富山県・高岡市立博物館では、特別展「農民魂をもつ大学者 五十嵐篤好」を開催し、学問や勸農に努めた郷土の偉人・五十嵐篤好の業績について紹介する展示を行った（二〇一七年七月二九日～一〇月五日）。

二 『天朝墨談』序文二種

『天朝墨談』は、当時隆盛した御家流の正脈を明らかにし、日本の書道とは、いかなるものであるかを詳述したものである。その冒頭には、篤好の師である高田祐久の序文と篤好の自序がある。まず、師・祐久の序文を翻刻し、解説を付したい。この序文によって、『天朝墨談』の趣旨や完成までの足跡を窺うことができる。次いで、篤好の自序を示す。

〔原文〕は版本にできるだけ忠実に起こすよう心掛け、旧字をくずした草書は、旧字で翻刻した。なお、改行は底本（『日本書論集成』第二巻所収）のままとし、適宜ルビを振った。また、〔解説〕〔解説〕を付した。

〔原文〕

天地の間にあらゆるもの神霊ならざるは

なし。中にも人は天地の正しき氣を直に受得、かみを内外に俱るが故に靈長とはいふなり。禽獸の如く飛行自在の怪しき通力のなきも、天地の正しきを得たればなり。されば此靈長相應の通力神妙の術は、唯筆道にあり。筆を執て文字を為せば、正に心中の清濁淨穢を見はず。敬み恐み耻べしく、故に太祖一品

尊圓親王は、藝の外、心の術ぞと示し給へり。然るに今世専ら異風の字体行はれ、人の眼を悦ばしめ、又、興する類ひ多し。所謂傀儡倡優を愛するにひとし

からむか。如斯信、ごころを失へること歎くべきわざならずや。こゝに予が門弟、五十嵐篤好、國に仕へて、暇なき身なれども、

太祖よりの御筆意を深く信じ、厚く仰奉り、予に因み學ぶこと数十年、更に怠慢なし。予其信ごころにめで、彼より問に應じて、おのづから御傳を洩すこと屢なりしか。猶も奥旨を探り索る志の切なるを感じ、其人に傳へよとの

太祖の御遺し言は、此人あるゆゑならむと、去る天保元年仲冬、御傳悉く授しかば、実に晴夜に日光を拜したる如く、胸中明朗になりしと歎喜の涙にくれたり。

しかして後、日々の切瑳、月々の琢磨怠らず。やゝ大旨を得るに似たりしゆゑ、己れごころに

天地の圓小なりゆゑの神靈あり
 かつ中に人ぞ此の字も
 直に史のかきを因小俱なる故に
 靈長とんひふり會致りや致り
 自ら乃懐と通カれるもと
 正しきを得れぬりされぬ靈長
 相良の通カ神神術唯筆道不
 あり筆と教く文を筆を以平中
 まは活潑筆を以て下敷と云ひし
 故に右祖一品
 尊國親王義の外なる術と云
 活りり後々今世も其内の書作
 行はし人の眼と懐く其真と教ひ
 多し其理儀供侶信と愛と云ひし

うゝ書はの儀の好と云ふも
 為れざるもと云ふに
 其國不仕へて時を待たれども
 太祖のりの御筆意を深く信
 する御筆のまに因と云ふも
 文と書はるも其後をありて
 故より因小表してゆりし
 志を馬ありし行と其書を揮り
 志を切をうと云ふ其小信への
 太祖の御遺と云ふ人ありと云ふ
 本も天保元年仲冬御傳悉く採り
 其小信夜目を見を終りたる御
 明湖ありと教はる後と云ふ
 志より後日の御筆は其意を以

や本を得ふはよむべきと云ふ
 傳つてはかきはの足と云ふ
 其二年仲夏は其書を以て
 法利と云ふ因と云ふ首尾悉く
 其のひは其意を以て著すと云ふ
 太祖の御意は其意を以て
 従来國志の門小なり其意あり

且書と辨しつゝ頓而留めおきぬ

龍池院宮
 尊朝親王御傳流第七世
 天保二年卯五月
 高田源祐久

得つる程をかいつゞり、見せよと令しかば、

翌二年仲夏、此五とちを書つゞりて、予に

添削を乞ふ。閱するに首尾悉く道に

かなひ前代未見の著述たり。かくも

太祖の御意を得てしことよと、感喜浅からず。

従来同志の門弟に示し、習学のたより

且惑を辨へしめむと頓而留めおきぬ。

龍池院宮

尊朝親王御傳流第七世

天保二年卯五月

高田源祐久

〔解説〕

これは、篤好の師・高田（源）祐久が、天保二年（一八三一）五月に認めた序文である。祐久は、「龍池院宮尊朝親王御伝流第七世」と

称するが、「龍池院」は、尊朝親王（一五五二—一五九七）の諡号で、その書流を継承して七世に当たると自称したものである。祐久は序文の冒頭で次のように記す。

天地において神靈ならざるものはないが、とりわけ人は別格で、それゆえ霊長と言う。そしてこの霊長に相応しき通力神妙の術が「筆道」である。筆を執って文字を書くとき、まさに心中の清濁淨穢があらわれるからである。

祐久が「太祖」と尊称するのは尊円親王（一二九八—一三五六）のことである。尊円親王は、能書帝・伏見天皇の第六皇子。京都・青蓮院に入り、延慶三年（一一三一〇）、親王宣下を蒙り、翌、応長元年（一二二二）、薙髪して法名を改め、青蓮院門跡となった。以降、正平一年（一二五六）、五九歳で没するまでに、天台座主に四度、青蓮院門跡に三度補され、晩年には四天王寺別当も歴任している。

尊円親王は、和漢兼学の知識人として諸芸に通じたが、殊に能書の誉れ高く、日本書道史上に特筆される。世尊寺流を学んだ後、一家を成したその書風は、青蓮院の歴代門跡をはじめ、多くの追隨者を生み、尊円流（青蓮院流）として、一大書流を形成した。江戸時代に入ると、御家流と名を変え、公用書体として永く命脈を保ったことは、夙に知られている。その著『入木抄』（一二三二成立）は、尊円親王の書道観を集大成したもので、中世随一の書論である。

なお、尊円親王筆「天神名号」には、祐久の極め書き（鑑定書）が付されている。これは、篤好が鑑定を師に依頼したものと思われ、五十嵐家に伝存する。また、祐久が祖と仰ぐ尊朝親王は、室町後期・安土桃山時代の法親王である。尊朝親王について、『校正王代一覽』後編によると、「正親町帝ノ御猶子ニテ、伏見邦輔親王ノ男ナリ。龍池院宮ト號ス。粟田青蓮院尊鎮法親王ノ法嗣ニシテ、尊圓法親王ヨリ十一代ノ主ナリ」とあり、尊円親王の十一世に当たる。伏見宮邦輔親王の第六王子で、正親町天皇の猶子となり、弘治元年（一五五五）、青

蓮院に入り、親王宣下を蒙った。永禄五年（一五六二）に薙髪し、尊朝と号し、四天王寺別当、平等院管領、天台座主等に補された。特に書に優れ、その書は尊朝流として尊重された。

広く指摘はされていないことであるが、当時流布したキリシタン版で用いられた活字は、筆跡明快な尊朝流を基盤としたものと考えられる。そのこともあり、江戸時代に公用書体として隆盛を誇った御家流は、尊円親王を端緒とする青蓮院流ではあるが、実際には尊朝流に基づくものと理解するのが妥当であろう。尊朝親王の著に『手習十三ヶ条記』『墨池掌譜』等がある。

祐久は、尊円親王の言葉として、「藝の外、心の術ぞと示し給へり」を挙げるが、『入木抄』の「此事にかぎらず、此道其実を申候へば、仏法のさとりよりおこりて、世俗の技藝に出候ては、管絃・音曲・詩歌、いづれもく諸道の邪正、是にて候」を踏まえたものであろう。

なお、「此事」とは、入木道のことである。
また、祐久は、「今世専ら異風の字体行はれ、人の眼を悦ばしめ、又、興ずる類ひ多し」と憂えるが、『入木抄』にも「たゞいさゝかも異途に目をかけずして、一すぢに正路にしたがひて、たゞしき所をならひ書候へば、其筆に達候ぬる後は、彼の自在無窮の体も、心にまかせてかゝ候候なり。曲折風流を本とし候へば、さらに風流曲折もうるはしくうつされず候。見知らず候人は、其体ばかりをあさく見なし、相似たりと見候へども、道を知りたるまなこの前にはあらぬ物にて候也」とあり、尊円親王の時代においても同様の状況があったことが窺える。

さて、そのような見栄えを重んじ、小手先の技量に走る傾向のある中、祐久は門弟・篤好の熱心な学究態度を称賛する。祐久は篤好に、折に触れて御家流の梗概を説くが、篤好はさらにその奥旨を極めんと切望する。そこで、祐久は、その奥旨を授けたところ、篤好は、「晴夜に日光を拜したる如く、胸中明朗になりし」と歓喜の涙にくれたと

いう。果たして、切磋琢磨の後、五綴の書を成して、その添削を乞うてきたというのである。祐久は、首尾一貫して太祖・尊円親王の御意を余すところなく伝えたこの書を「前代未見の著述」と絶賛し、ここに『天朝墨談』は誕生したのである。

次に、篤好による自序を示す。万葉仮名によって記された格調高い美文で、国学者としての矜持を示すものである。

〔原文〕

沙夫志畿毳、止茂斯起鴨、玉雄琴
 廼、美豆美豆志紀美味音、野羽玉
 乃、夜音能遠音爾裳、所聞來婆、紐
 解放弓、立走世武平、奈麻與美乃、
 甲斐國、幡薄、穗坂牧從、牽駒廼、耳
 振立禮杼、嵐吹、枯野之原乃、佐夜
 既留音能微所聞喚鷄、耳宇既怒
 倍久那毛安類、阿那沙夫志、阿那
 止茂斯、玉雄琴廼、美豆美豆志起
 美味音、宇麻毘登乃、瑞能御手茂
 知、亮亮爾揆鳴婆、荒金乃、地仁響
 紀、久方乃、天仁茂所聞弓麻芝乎、
 取毛不見、傳置布留之都都、塵高
 久宇頭毛理氣良久、伊殿此佐夜
 既留枯野刈退武、燒鎌乃、敏鎌欲
 得、此積連留塵打拂武、天津菅曾
 廼、佐幾波良此我裳

天保二年六月 篤好

〔解説〕

さぶしきかも、ともしきかも、玉をことの、みづみづしきうまし音、ぬば玉の、夜音の遠音にも、聞こえこば、ひもときさけて、立ち走りせむを、なまよみの、甲斐の国、はたすすき、穂坂のまきゆ、牽く駒の、耳振り立つれど、嵐吹く、枯野の原の、さやげる音のみ聞こえつつ、耳うけぬべくなもある

あなさぶし、あなともし、玉をことの、みづみづしきうまし音、うまひとの、みづのみてもち、さやさやにかきなせば、荒金の、地に響き、久方の、天にも聞こえてましを、取りも見ず、伝へ置きふるしつつ、塵高くうづもりけらく、いで此のさやげる枯野刈りそけむ、焼鎌の、とがまえまほり、此の積もれる塵打ち払はむ、あまつすがその、さきはらひがも

天保二年六月、篤好

三 『天朝墨談』 概説

さまざまな分野に通じた篤好であるが、殊に書道に造詣が深かった。書論として『天朝墨談』全五巻を編んだが、本書には他書に見られぬ大きな特徴がある。それは、江戸時代の書論の多くが、中国書論を抄出しながら自説を加えて論ずる傾向にあるのに対し、『天朝墨談』は、日本の書道を根幹に据えて著述している点である。国学者としての立場が、わが国の古典籍重視につながったのであろう。

書名に「墨談」を冠したことは、おそらく「幕末の三筆」の一人に数えられる市河米庵（安永八―安政五（一七七九―一八五八）著『米庵墨談』全三巻（一八一―二刊）、同続編全三巻（一八二―七刊））を念頭においてのことと思われる。『米庵墨談』は、近世の唐様書論の集大成ともいえるべき大著であるが、『天朝墨談』は、本朝の墨談の意を寓したものと考えられる。本書の大部分分量も、『米庵墨談』を意識

してのものであったらどうか。本朝を強く意識していることは、「是は天朝の墨談なれば、みづき物語ともいふべし」（巻一・手）と述べていることから明らかである。

『天朝墨談』は、篤好の自序や跋、また、師の高田祐久の序によって、天保二年（一八三一）には成立していたことが知られる。だが、江戸浅草茅町（現在の台東区浅草橋）の四代目・青藜閣須原屋伊八より刊行されたのは安政六年（一八五九）と、三〇年近くが経過してからのことであり、篤好は最晩年を迎えていた。本書の末尾に安政六年五月の最上久成の跋があることに拠り、本書の刊行年が明らかとなるが、この跋文では、ここまで日延べした事情については明らかにしていない。成稿から上梓に至るまでの年月の経過は詳らかでないが、結果的に篤好畢生の大著として世に出ることになったのであった。

夫 本書は、その書名に示すように、日本の書道に関する事々を巨細に拘らず書き記したものである。序に次いで、二丁に亙って、標目（目次）を示す。この標目には、注記があり、これによって、それぞれの項目の趣旨が明らかとなる。以下に、標目を列挙する。

天朝墨談標目

卷一

一 文字

もじといふものありてこゝろをなくさむることをいへり

一 和様・唐様

此名目あるべからざるの論あはげらるひなり

一 我國之手跡

聲萬国にすぐれたる故、手跡も亦すぐれたる事をいひ、大師の性霊集を引て天地の法則に随ふことをいへり

一 御流

尊圓親王より御傳流の系圖かつ此親王御心たけくすぐれておは

しましゝ事をいへり

一 古今筆跡

古筆の尊く今の書のおとれるは学びの心得あしきゆゑなる事を

論へり

一 手習

手ならふ心得をしるし、根元心氣を煉るべきことをいへり

一 手

中昔の物がたりどもに手のこといへる所々をあげて、文字のうへに其時の情あらはるゝ事をいへり

卷二

一 手 前のつゞき

源氏梅が枝の巻にいへる書論をはじめ、諸書を引出たり。また額字の事等をもくはしくいへり

卷三

一 いろは

難波津・浅香山・あめつちほしそらの事等をいへり

一 かな

まな・かたかな・をんなで・をとこで、といふ事をいへり

一 芦手

水手・哥繪の事をもあげて、芦手といふものゝ考へをくはしくしるしたり

一 御画

判・押字・花押ともいひて、名の字を草書にする事をいへり

一 手本

石ずりのこと、集古字のもの学ぶべからざる事を論ひ、運筆、遅速等の事をいへり

一 ふみ

水莖・玉梓・草木に文つくる事、文挿フバサミの事、結び文、たつ文、ひねり文、鯉口、薄やう重ね等の事をいへり

一 巻四

一 紙

薄やう檀紙等色々な紙の事を出し、色はだへのことをもいへり

一 草紙

手習ひする草紙の事いろく説あり

一 筆

筆の結びやう、毛のうらおもてある事、把筆の事、直筆といふ事の論等をいへり

一 巻五

一 墨

古墨の事をあげ、石墨の事もいへり。又墨のすりやうにも心得ある事をいへり

一 硯

石材さまざまある事、硯を左におく事もいへり

一 水滴

水のこと、瓶を用ること等をいへり

一 文鎖

夾竿クラサン・塚竿ケサシの事等をいへり

一 机 文臺

しもとづくえ、結びづくえの事もいへり

一 書齋

四季によりて心得あることをいへり

一 雑事

結びめに墨引く事、哥に欠字の事等くさぐいへり

手かく事は、から國に出來し事なれども、うつしとりては、また我國の風土によりて、優美にして、かつ武きかたのすぐれたるものなり。その味へ、此墨談を見てしるべきなり。

この標目一覧を見ても、文字や書法のみならず、故実や文具に至るまで、幅広く著述していることが明らかである。

以下にその内容を要約する。それぞれの項は独立したものはあるが、これを連続して眺めると、一つの書道史を形成していることがわかる。

「文字」では、「手かくわざばかりをかききものはあらじ」と説き起こし、『枕草子』「過ぎにしかた恋しきもの」の章段より「しみじみとした人の手紙」を挙げる。「文字」は、心慰めるものである、と言ひ、「人として学ばずばあるべからざるものなりかし。手してするわざはしも多かるを、てといへば、ものかくわざなるをもても、此道の尊き事をおもふべし」と、手で文字を書くことの重要性を述べている。また、江戸時代前期の教訓書『和論語』より、巻四・公卿部下の菅（菅原）茂長・藤（藤原）兼嗣、巻九・釈子部中の兼好らの言を引用し、古人との対話がなせるのは、その筆跡を通してであり、後世の人々が先人の人と為りを偲ぶのも文字を頼りにする、上手下手ということにとらわれず、文字を書くことは、その人の心霊が表出することである、と説く。

「和様・唐様」は、篤好の面目躍如たる項である。篤好は、「和様」「唐様」と呼称する風潮を強く批判する。「此名目あるべからざるの論あはつちひなり」と、「和様」「唐様」の名目は、本来、分別する必要のないものと主張する。その理由として、日本人の書く文字は、元々中国から学んだものであるから、唐様でないものはなく、その一方で、日

本人が書く文字であるならば、和様でないものはない、と指摘する。

これは、近時の呼称であり、『源氏物語』には書に関する記述が多くあるも、一箇所も「からざまに書きたり」というような表記は見られない、と指摘する。その上で、「只優美なるを和様といひ、かどたちたるを唐様といはむなどは論の外なり。筆道につきて此名目をいふべきことはなきなり」と舌鋒鋭く批判する。そして、篤好は日本人の目指すべき書は「大和風^{やまとかぜ}」である、と提唱する。

また、篤好は、日本人が中国の書を受容した例として、以下の例を挙げる。『万葉集』では、助詞の「てし」に、「義之」を当てるが、これは、王羲之が書を能くした人（＝手師）であるため「てし」と読んだのである。このことから、日本人が王羲之の書をよく学んだことの証である、とする。そして、太祖・尊円親王も王羲之の書を愛で、習熟したと述べている。このように、日本は中国から書を受容し、はたして我が国の精神をもって文字を書けば、「大和風」にならないものではなく、これを「和様」「唐様」と区別せんとすることは、そもそもおかしいことなのである、と舌鋒鋭く批判する。

「我國之手跡」では、「和様・唐様」の項で、「太祖（おほみおや）」と最上位に位置付けた尊円（尊圓）親王を尊崇し、信奉をもって記述する。尊円親王の書こそ、王羲之書法に習熟し、自家葉籠中のものとして一家を成したとする。

本項では、日本の書の特徴を中国と対比しながら述べる。中国が「から」と呼ばれる理由を縷々述べるが、遣唐使の辛苦を思つて「からし」とする、自然の風物が「枯れる」、草木が実を付けずに「から」である、死骸を「から」と言う、男女の仲が離れることを「かるる」と言う等々、些か牽強附会の感は免れない。一方、「みづの御舎」「みづの御手」等を例に、日本がいかに「潤沢」であるか、みずみずしいかを強調する。日本は、「神の結びのうまし国」であると述べ、「かく優美なる中に武をもちたるこそ、真の強しといふべけれ。文字の心も

かくあるべき事になむ」と持論を強調する。

また、嵯峨天皇と空海が書法を争つた故事、小野道風の柳蛙に感じて筆法を会得した故事なども紹介する。そして、日本の書を「されば文字も、みづくしく活々したるゆゑ、いとくめでたく、いとく勝れたるなり」と述べ、「みずみずしさ」にこそ、その特徴があると総括する。筆跡を「水莖」と称する所以であろう。

「御流」は、御家流の正統を説いた項である。尊円親王の教えのみを正統とし、それ以外は本元を弁えない誤りであるとする。正統を知らぬままに手前勝手に御家流を名乗るものがあるが、これは親王の筆跡とは大きく異なっていると述べている。御家流（青蓮院流）は、世尊寺流の流れを汲む流派で、江戸時代には公用書体と任じられたものであるが、勝手流が見られたようである。

尊円親王が王羲之書法を学んだことは、「和様・唐様」の項で既に述べているが、神道も修め、その真髄を得ているため、親王の筆跡こそ真の唐様であり、また、真の和様であると述べている。その上で、当世の唐様、和様は皆が自分勝手に行つており、さらに他者を批判し、自らこそ正統であるとするのはあさましいことだ、と当時の状況を嘆いている。

本項末には御家流の正統を示す系図が示され、京都粟田にある青蓮院を本拠としていた流派が、紀州（紀伊国）、参州（三河国）を経て、加州（加賀国）金沢に伝播した経緯が窺える。師の高田祐久が御家流に連なるものであること、延いては篤好自身もその系譜にあることを暗示する。

「古今筆跡」は、古今の筆跡について論じた項である。前半部では、唐ぶり（中国風）と称していかめしく紙せましと書き殴るさまを批判し、一方で、当世の大和ぶりなるものも、みみずがのたぐつたが如き脆弱なものであると断じている。これをもって「唐様」「和様」と称することは笑止、ということであろう。後半部は、神道に通じた

篤好らしい著述であるが、朱子学で流行した「或問」のスタイルをもつて、尊円親王の筆道を信奉しているところが興味深い。

「手習」では、手習いとはどうあるべきかを述べている。単に、その筆跡を学ぶことではなく、その志を学ぶことであると唱える。志を学ばず、筆跡だけを学ぼうとするのは、根を植えずして花を咲かせようとするようなものであるという。実方との口論で取り乱さなかつた行成を「能書なりけるも、うべなるかな」（能書であるのも、もつともであるなあ）と評したことは実に面白い。何事も奥義を知ることとは、心裏を理解して自家菜籠中のものとしてこそ、会得できるものであると説く。

巻一・巻二と連続する形で、「手」に関してまとめる。ここでは、文学作品から書に関する記述を引用し、書論を構成する。巻一では、大和ぶりと瑞くき（水荃）であることを説く。瑞々しいこと、それが即ち本朝でいうところの水荃である、と述べる。昔物語では「まづ手の事をこそいはれたれ」とあるように、『狭衣物語』『源氏物語』『宇津保物語』『とりかえば物語』『蜻蛉日記』『拾遺和歌集』などの文学作品から、手跡に関する事項を抄出する。文字を書くことの重要性を改めて認識する。筆を持つてものを書くことは後に中国から伝来したことであるとしながらも、イザナギノミコト、イザナミノミコトの二柱が天の浮橋の上で、天の逆鋒を用いて蒼海原をかき混ぜる様子が、硯の深い部分を海といい、筆を逆さにして用いる様子と似ており、二柱がそこから万物を生み出すことも関連している、と述べている。そして、「文字」の項目で述べているように、書かれた文字には書いた人の全てがあらわれていると述べている。

巻二では、巻一の末部から続き、「手」に関する論が述べられている。この巻では、能書とはいかなるものであるか、を根幹に、或問形式で論が展開されている。ある貴人の間に、本阿弥光悦が答える形で能書を列挙するが、光悦は謙遜の風を装いながら自らを挙げ、加賀の

松斎、八幡の坊主と続ける。八幡の坊主とは、瀧本坊、即ち松花堂昭乘（惺々翁）を指す。篤好は、光悦、昭乗に、御家流を学んだとする池田松斎を加え、当時「三筆」と呼ばれていた、とするが、松斎は、真直ではあるものの、ことさらに特長があるというわけではなかったため、その名が知られることはなかつたという。

なお、今日では光悦、昭乗に近衛信尹を加えた三人が「寛永の三筆」と呼ばれることを付記しておく。信尹は青蓮院流を学んだとされ、実際には寛永年間には活動していないものの、近衛流（三藐院流）と呼ばれる骨力ある線を緩急自在に運筆する流派が流行するほど著名であった。

篤好は、『源氏物語』や『和論語』の言を引用しながら、ただ形を追い求めるだけでは、筆にとらわれるばかりで浅ましいことであり、書いた文字に「精霊」が宿るものこそ、真の能書であるとする。日本文化が最も隆盛した延喜・天曆の時代に能書が多く誕生したとしており、その衰退を嘆いた尊円親王が、御家流を創始したと述べている。

巻三では、文字の種別やさまざまな書の形態について論ずる。まず、「いろは」の項では、手習いの始めとして、『古今和歌集』仮名序で「手習ふ人のはじめにもしける」と示される「難波津」「浅香山」を挙げる。当時、この手習い始めが定着していた様子は、『源氏物語』若紫巻からも窺える。平安時代には「難波津の歌」「浅香山の歌」と言えば、「誰でも知っている歌」の代名詞となっていたのである。

江戸時代の国学者、富士谷御杖はその著『北邊隨筆』の中で、「難波津」「浅香山」の後は、「あめつちほしそら」を学書の始めとして挙げる。この「あめつち」の詞は、中国の『千字文』を意識して作られたともいう。また、一〇世紀半ばには成立していたとみられる『宇津保物語』国議上の巻に手習いの手本、すなわち毛筆で仮名を書いたための手本としてその名が見え、それにより「あめつち」の詞は手習いに使われたといわれる。

但し、そもそも手習いをするための手本としては、「難波津」や「浅香山」の歌があり、仮に「あめつち」の詞が手習いに使用されることがあったとしても、それほど一般には普及しなかったであろうと考えられている。南北朝時代の北畠親房著『古今集序註』には、「あめつち」の詞が、「いろは歌」の仏教的な内容を嫌う人々の間で手習いに用いられた、と記されており、「いろは歌」の代用的要素があったことが推察される。

篤好は、今世専ら「高野大師のいろは歌」を手習い始めとする、と述べるが、「いろは歌」が高野大師（空海）の作であるというのは、無論俗信である。仮名を網羅した「いろは歌」は、一世紀頃から仮名を手習いするための手本として使われるようになり、江戸時代に入るとさらに広く用いられたのである。

夫 徳 由 永

卷三は、「いろは」に次いで、約四丁分の「かな」（まな・かたかな・をんなで・をとこで）の項がある。「かな」の項では、『源氏物語』『枕草子』『土佐日記』『宇津保物語』『大鏡』等の古典文学を引用しながら各体について概説する。

各体の中で、特筆すべきは「芦手（水手、歌絵）」である。およそ一三丁分にも互る解説があり、その内、図解が六丁分ある。今日の書学では「葦手」と表記するのが一般的であるが、『天朝墨談』では、「芦手」と表記する。冒頭の標目に、「一、芦手」と掲げた下部に、「水手・歌絵の事をもあげて、芦手といふものゝ考へをくはしくしたり」とあり、近似する「水手」「歌絵」と区別することで、「芦手」を明らかにしようとするものである。しかしながら、篤好自身、「芦手の事、是ぞとさだかにはいひがたし。先達の説もさまざまにて一定せず」と述べており、その区別には苦慮している。

まず、「水手」については、『東三条院置麥合』中の藤原能宣の詞書「このすはまのこころ葉にみづてにて」とあることから、「文字の尾なごを長くひきなして、水の流るゝやうに書きなしたるもの」と推量し

ている。実際に例示された源家長・俊恵法師・藤原基家の歌を見てみると、左文字（鏡文字）や文字の転倒など、きわめて自在に運筆する。平安時代中期の藤原明衡著『新猿楽記』には、天下の能書の太郎主が「真字・仮字・葦手・水手等の上手なり」と記され、「葦手」と「水手」は別の書体として区別されている。

「歌絵」は、「哥繪といへるは繪が主なり。芦手・水手は手が主なるにて弁ふべし」と述べ、また、「歌繪とは哥一首を繪と文字とにてかきたるものあり」とも述べている。すなわち、「葦手」「水手」は文字が主であるが、「歌絵」は歌が主であるという。但し、歌一首を繪と文字によって書いたものとする。図解を見ても、太刀の鞘は、波模様・葦辺・鶴が主であり、その中に文字が紛れている。また、俊成女の歌が書かれた蒔絵料紙箱は、森林の幹に絡まるように文字が書かれ、図柄全体が月を示している。

「葦手」の解釈が最も難解である。篤好は、『源氏物語』梅枝巻の一節を引き、「水も芦も石も、みな文字にて書きたるさまに聞ゆ」とかと考究する。「東三条院置麥合」を再び検証し、これは「歌絵」とも取れると逡巡する。その考察の仮定で、篤好は『北邊隨筆』に基づき、「芦手を下絵にかきて、そのうへに文かくことなり」という一つの結論を得る。但し、例示する藤原伊行「葦手下絵和漢朗詠集」について、「此圖、全く芦手とはいはれず。哥繪と芦手とをとり合て、又一種此体のものを書きしなるべし」と懊悩する。その上で、葦手を学ぶにあたり、「是を学ばゝ、やゝもせば俗になるべし。いかにも氣象高く風流にかくべきものなり」と俗に陥ることを戒め、風雅であること説くのである。

「手本」では、市河米庵の言として、「吾幼より三王并米家の古法帖を得て、一日もおちず是を学び、書論にくらべよみ味ひ、手習ひする事四十余年、功積りてやゝ會得する所有り。只歎かしきは墨汁を筆にふくまする事と、筆の運びのときゆるぎの味ひは絶て知るべからず。今

はひたすら真蹟を見む事を希ふのみなり、といへり」を引き、篤好自身もこれを首肯する。米庵が「学書之法、真蹟为上(学書の法、真蹟を上と為す)」「米庵墨談」卷二)とする所以である、と篤好は解釈し、真蹟による学書が可能な尊円親王を祖とする書法の正脈を主張する。

「ふみ」では、「ふみ(文)」を定義し、「水荃」「玉梓」の解釈を紹介する。種々の古典文学を引用し、「ふみ(文)」の贈答に、いかに教養と機智が求められたかを伝える。

巻四・巻五では、紙、草紙、筆、墨、硯、水滴、文鎮、机、書齋といった文房四宝についてまとめる。文房四宝にこれだけ紙幅を割くのは、極めて珍しい。

『天朝墨談』跋文

打撃くくくくかぬ支那此
もくもく人いんも今
せろくくぬあゆのまを
漢弟々あつたく解くを
秋の野山のあぢあぢい
小川のいさ先んかす昨
漢の浪のうかかふるま
くをむけくくくくく
く地乃くくくくく
くあわむや、今時天朝墨
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく

朝ふあぢく
大沖國乃いあきく
くくくくくくくく
月乃りあぢくくく
信さくくくくく
くくくくくくく
く人あけくくく
くくくくく
安政六年六月 署と成
津森門人 本村書員 書

標目の最後に、「書道は中国発祥のものであるが、日本の書は、わが国の風土によって、優美にして力強さをも有するすぐれたものとなった」と総括しており、後掲の項では、これを「大和風」と表現している。本書全編に亘って、御家流のみが書法の正脈であるかのごとき我が朝尊しちやうの感無きにもあらずであるが、『天朝墨談』を名乗る所以が端的に示されていると言えよう。

四 『天朝墨談』自記及び跋文

最後に、『天朝墨談』の自記及び跋文の二種を翻刻する。一つは、巻五「雑事」に付した篤好の総括と自記で、天保二年(一八三二)六月に、自ら記述したものである。尊円親王の書を

称えるとともに、時世を深く憂慮している。そして、中国風に追従するのではなく、日本の書の良さに気付くべきであることを提唱する。

(原文)

太祖

尊円親王、ねもころにさとし置給へり。世に懸幅屏風などを書ちらし、是を上なきわざとおもへるたぐひとは大にことなり。然るに、無為にして品高ききは目も及ばねば、からぶりのわれはがほなる癖ある手を、おもしろく覺えもてはやしぬるまゝに、形ばかりなる石刻を、春の夜の一時にもかふるばかりにぞ成にける。そが中に、肉筆ならでは知りがたきところありと心付たる人々も、我國に勝れたるがある事を知らで、ひたすらから人のをもとむるからに、是を得がたとしと歎きわた

り、いよゝますくゝひがみもてゆけば、世人も是に雷同して、つひにおのが國に勝れたる御をしへのある事を知らぬ世となしはてぬ。しかはあれど、大直日神ましませば、近き比漸々我くにの勝れたることをきゝ知り、筆道も外ならぬ事を知る人も出来ぬがうれしさに、こゝにかゝる尊き御をしへぞ傳りたるといひしらせまほしう、そゝるこゝろとゞめがたくなむ。

筆とれば筆にとられ、物かけば蜩にさへ笑るゝ、此篤好にしも、いかなる神の幸にかありけむ。去年嚴冬、高田のうし、その人に傳へよとある御をしへなればとて、

尊圓親王より神傳へにつたへ來し筆の道を傳へ給はりぬ。いとも尊く、たゞかしこみにかしこみ居たりけるに、此ごろ師、篤好が心に得たる處を同志の者にしめすこゝろにて書しるして見せよとの給へるまゝに、難波津の何はしらねど、浅香山あさきこゝろのまゝをしるしたるになむ。

天保二年六月 五十嵐篤好

今一つは、篤好自記に遅れること約三〇年、本書刊行にあつて安政六年（一八五九）五月、最上久成の撰文により、篤好と同門の木村壽員が清書した跋文である。壽員については、『天朝墨談』「かな」に、「師より木村壽員に給はりし徹山大とこの手跡、今川の手本には、一文字数十あるを、ことごとくかきかへられたり……」と、その名が見えることから、篤好とは近い関係にあったのであろう。壽員の筆致からは、御家流正脈と称する一派の書風を確認することができぬ。なお、改行は原本に従つた。

〔原文〕

おほくてくるしからぬ文車の

ふみと、むかし人はいへれど、今の世のさかしらびとのものせるは、

浅茅が原のあさはかなることをも秋の野山のにしきあやなし。いさゝ

小川のいさゝめごとを、高師の濱の浪のあだなるさまに書散らし

たるぞおほかる。さる文どもは、くるし

からぬのみこそあれ。みるめのうらの

かひあらむやは。今此天朝墨談を

見るに、もはら手かくことを論ひて、

その道にふれたるものゝ有やうを

つばらにしるし、吾

大御國のいみじきことゝ、異國々の

さがなきことのけぢめを最中の

月のあきらかに説きとされたり。

されば、おほくてくるしからぬは

さらなり。是らのふみは車の

たへぬばかりあらなむと

こそおぼゆれ。

安政六年五月 最上久成

しるす

無染齋門人

木村壽員

書之

跋文中に「もはら手かくことを論ひて、その道にふれたるものゝ有やうをつばらにしるし」とあるように、篤好がわが國の書について、いかに広汎に亙つて詳述したか、その視点の幅の広さは特筆に値する。

『天朝墨談』は、卷一（文字、和様・唐様、我國之手跡、御流、古

今筆跡、手習、手・巻二（手）、巻三（いろは、かな、芦手、御画、手本、ふみ）にその真髓が著され、当時の日本書学を大成する。だが、篤好の関心はそれにとどまらない。

巻四では「紙」「草紙」「筆」、巻五では「墨」「硯」「水滴」「文鎮」「机」「書斎」「雑事」と、文房四宝はじめ、書に関するさまざまのことに及んでいる。本書は確かに、御家流を標榜する点において一貫しているが、分量においても、内容においても、わが国の書論の中にあって、有数屈指のものと言えるだろう。

【参考文献】

- 『日本書論集成』第二巻 汲古書院、一九七八
『日本随筆大成』第三期 第五巻 吉川弘文館、一九七七
『百家説林』続編中巻 吉川弘文館、一九〇六
『中国書論大系』第四巻 二玄社、一九八一
『下田村文化財調査報告書』一…五十嵐小文治館発掘調査報告 下田村教育委員会、一九七三
永田徳夫「江戸時代の書論（22）五十嵐篤好『天朝墨談』（一）」「修美』第一四六号、二〇二三／「江戸時代の書論（23）五十嵐篤好『天朝墨談』（二）」「修美』第一四七号、二〇二三／「江戸時代の書論（24）五十嵐篤好『天朝墨談』（三）」「修美』第一四八号、二〇二四／「江戸時代の書論（25）五十嵐篤好『天朝墨談』（四）」「修美』第一四九号、二〇二四

【付記】

『天朝墨談』の影印は、『日本書論集成』第二巻より転載した。茲に深甚なる謝意を表す。『天朝墨談』本文の翻刻は、『修美』第一四六号～第一四九号を参照された。

なお、本研究は、JSPS 科研費・基盤研究（C）「近世書論を基盤とする「日本書論史」の展開（課題番号：20K00122）」の助成を受けたものである。

（令和六年十月十六日受理）

